

仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
 980 仙台市本町一丁目2番12号
 電話〇二二二一七三七七番
 編集・発行人 首藤 正義

日本の『体制』に対する警告！ 村首神父 押捺拒否

10月の月例会（教区邦人司祭）は久々に沸いた。10月27日の各新聞が大見出しで村首師のことをとりあげた。「仙台在住のベルギー人指紋押捺を拒む」「東北初の押なつ拒否」「日本の国際化に逆行」と。

押捺拒否



10月22日、村首師は登録証明書の切り替え確認申請のため仙台市役所窓口を訪れた際、書類の必要事項は記入したものの、女性職員が求めた指紋押なつを拒否した。

村首師は昭和31年、宣教師としてベルギーから来日した。同師は仙台教区内の米川教会・築館教会の主任司祭を歴任し、現在、白百合短大の講師として教鞭を執る傍ら泉市・鶴ヶ谷の仙台市郊外で宣教司牧の任に当っている。押なつ拒否したのは今回がはじめてである。

嫌がらせるのほどほどに

「来日当初、指紋をとられた時、変だな、イヤだなと思ったが日本の習慣と思って押し

た。以前は3年毎で今まで8回位押しした。不快な気持ちを同僚に語ったところ、「法律が改正されるから我慢しなさい」ということで我慢しつづけた」。最近、更新が3年から5年に改正されたが、村首師にとっては何も改善されたことにはならなかった。「人を嫌がらせるのほどほどにしてほしい」と、今回の行動となったのである。

カトリック教会内では初めてのこと

カトリック宣教師として日本で働いている外国人は、一八〇一人（中央協統計一九八三年度）であるが、カトリック教会での押なつ拒否ははじめてである。

村首師の押なつ拒否には4つの理由がある。

- ①指紋は変るはずがないのに何回も押す必要がない。
- ②人権差別である。犯罪者と外国人だけが指紋をとられる。
- ③法律を守らないなら外国に帰れと言うが、人間としてどこに住むかは自由である。決してお客ではない。
- ④法律を守ることは大切である。ベルギー政

府は日本人をどのように扱っているか、日本ではベルギー人をどのように扱っているか。国際条約で平等に扱われるはずなのに、日本だけが指紋をとるのは不平等である。同師は20年間法律を守ってずっと待ちつづけたが何も変らなかつた。それで、「別な道をとることに決めた」と語る。今のところ個人的な闘いである。裁判に負けるかも知れないが、負けるとわかっていても闘う決意をしている。

仙台市の判断が注目される

最近の裁判例では今年8月に東京地裁が、「指紋押捺制度は外国人登録の正確維持のため必要合憲」として有罪判決を言い渡している。仙台市議会は昨年12月、外国人登録法の改正を求める市民団体の陳情を採択。押捺廃止などの5項目にわたる改正を決議、法務大臣などに意見を送っており、仙台市の判断が注目される。

司教日程

（11月15日現在）



- 12月2日 カリタス・ジャパン||韓国農民会と懇談（東京）
- 3日 教区司祭団役員会（仙台）
- 6日 常任司教委員会（東京）
- 7日 スペルマン病院理事会（仙台）
- 12日 難民対策連絡会議（東京）
- 13日 カリタス・ジャパン事務局（東京）
- 17日 教区司祭団月例会（仙台）
- 18日 司教会議（東京）
- 24日 クリスマス深夜ミサ（元寺小路）
- 1月1日 新年平和ミサ（元寺小路）

百周年ミサ おごそかに

十和田カトリック教会

十和田カトリック教会(主任マルセル・ボリケン師)の創立百周年記念式典が11月3日同教会で関係者180人が集まって開かれた。18人の司祭による共同司式ミサの中で、佐藤司教によって4人の洗礼式が行なわれ、同教会にとって二重の喜びとなった。

記念式典の中でパリ、ドミニコ、ケベックの三つの外国宣教会の功績がたたえられ、同教会のからし種となった三浦家も表彰された。

同教会の建物は、昭和7年スイスの建築家マックス・ヒンデルの設計で建築されたロマネスク様式の格調高い教会堂であることが、名城大学建築歴史意匠研究室の調査でわかり、

「日本近代建築総覧」に登録されている。

クラベル司教の講演会開催さる

「フィリピン民衆の苦難の中からのメッセージ」

岩手カトリック・センターで10月13日、フィリピンのクラベル司教が、「フィリピン民衆の苦難の中からのメッセージ」と題する講演を行なった。

クラベル司教は司教団の中にあつて、つねに民衆の立場から問題解決に取り組み、指導力を発揮している人である。

司教は講演の中で、「私たちのことは私たち自身で解決する。日本の人たちは祈り、そして日本の企業がフィリピン民衆を苦しめていく実態を知り、それをやめさせる努力を日本

入れかわり立ちかわり出入りし、食事も一緒にしていく。家族はそれを何の不思議もなく受け入れ、あたりまえのことのようにふるまっていた。このような心暖まる光景は、今の日本では忘れ去られているものではないだろうか。



確かに日本は物質的には豊かである。物は、持てば持つほど欲が出てしまい、人間らしい素朴な心はますます減ってしまうのかもしれない。本当に大切なことを教えてくれたフィリピン体験学習であつた。(前田 由美||元寺小路)

フィリピン

体験学習II その二

体験学習を終えて早くも2か月半が過ぎた。しかし、私の心にはまだフィリピンが生きている。そして、思い出すたびに何か暖かい気持ちにさせられる。地方の田舎でよく見られる、のどかな自然に囲まれて生活しているインフアンタの人々は、物質的には貧しいが、その表情は生き生きしていて美しかった。笑顔がよく語りよく歌った。その様子はとても幸せそうだった。また人々は少ない物でもみんな分ちあつていた。一軒の家に近所の人が一

国内でして欲しい」と訴えた。

参加した約100人の人たちはフィリピンに対する認識を深め、フィリピンの指導者育成のための援助をし、「私たちは何ができるか」を考えながら散会した。

創立450年祭を祝う

「聖ウルスラ修道女会」



聖ウルスラ修道女会はこの11月、聖アンジェラ・メリチがイタリアのブレシアに修道女を創立してちょうど450年になる。

記念すべき年をふさわしく祝うにあたり、11月25日、カナダから総長を迎えて全修道女(日本管区)が一堂に会して、450年祭開会式を行なう。そして来年の11月25日までの一年間を、「生きているアンジェラ」のテーマのもとに特別な内的刷新の年とし、各修道女は創立者の精神をより深く生き、祈りを捧げることになつていく。

バザーの収益の一部送金

病に苦しむ韓国の人々のため

「東仙台教会」

毎年恒例のバザーが10月28日、東仙台教会で行なわれた。今回は結核に苦しむ韓国の人々に、収益金の一部(20万円)が送られる。

夏に訪韓した主任司祭が結核療養所の無料病棟の人々の生活状況を報告したのに対し、役員会が受けて、教会員並びにスカウト関係者全員の協力のもと今回の実りとなつた。

おらが教会 (48)

宮城・北仙台教会



北仙台教会は仙台市の北部、県道北仙台線と上杉山通り木町通線の交差点に位置し、今年で献堂33年になります。ドミニコ会の初代主任司祭ビエール・ピソネット神父様の尽力によって、ベトレヘム宣教会の建築技師カール・フロイレル師の設計により、一年半もの工期をついやして昭和26年8月1日に献堂され、その規模は、石塀と樹木で囲んだ敷地千坪の中に、鉄筋コンクリート造りで約500人の信者が祈禱できる22坪の聖堂、25メートルの鐘楼、別棟に司祭館があり、当時は東北最大の偉大な教会と報道されたとの事。現在でも環境には恵まれた教会です。

教会のシンボルである鐘楼は、昭和34年2月15日、小林司教様によって祝別され、鐘の年は当時百歳と言われました。祝別式が終つてから司教様は鐘に向かって、「汝は今から、神のみ栄えを鳴らせ、その御恵み、御恵の働きを心に感じ、救霊上の務めをよく果たす気になるようにどこまでも鳴りひびけ」とおごそかに役目を命じた、と言われております。

それから今日まで、教会の鐘は与えられた役目を忠実に果たしてきたのです。

ピソネット神父様は、20年間この教会の地盤を築き、現在は東京の修道院で御静養され、この教会発展のためにいつも心にとめて頂いております。二代目としてトラハン神父様が10年間（昭和58年11月帰天）、現在は活力あふれる若きブテット神父様が三代目の主任司祭です。

信徒数は五百人弱、日曜の御ミサは7時と9時で、160人ぐらい出席します。

活動の母体は信徒会で、本会は小教区の共同体として会員相互の信仰を深め、親睦を図るとともに、一致して使徒的活動を推進し、教会の使命に参加し寄与することを目的としています。4月の信徒総会で年間の活動・予算を審議・採択し、毎月第一日曜日の役員会で細部の検討をし、執行されております。

当教会は地域的に広大な小教区で、北四番丁以北が地域で、仙台市のほか泉市、富谷町、大和町の信徒もあり、日常密なつながりを持つため、信徒の住居地域によって8ブロックに地域割りを行なっております。ブロックごとに教会全体の活用、運用がリズムカルに動きがとれるよう、日頃、家庭集会や教会内での集会を開催し、近隣住居を共にする信徒相互のわがち合いを深め、信徒が一体となるためのブロック制を敷いてあるのが特徴です。信徒会名簿もブロックごとに記載されており、転入信徒もその住区によってブロックに配属になります。

年中行事の主なものは、4月の信徒総会、5月の教会庭草とり、日曜学校・青姉会が企画するハイキング、8月は当教会の守護の聖人ドミニコ祭、9月は敬老会、10月は教会の庭の草とり清掃、冬期を迎える中高生会、青年会、ヨゼフ会員によるストープ取り付け、又、郊外に足をのばして芋煮会、その他宮城県使徒職連絡協・合同会議主催の信徒大会、運動会、広瀬川殉教祭等、毎月行事があり、各会の担当は大変忙しがしく、中でも婦人会は功労者で、各行事の接待役を一手に引き受けております。特に大祭日のごちそう作り腕をふるい、バザーの出品物作り及び収集、聖堂の掃除等、毎週教会行事に活躍されております。

3年前、教皇ヨハネ・パウロ二世のご来日を目前にして当教会の献堂30周年記念を挙行し、30周年記念誌を発行して30年余の歴史の歩みを信徒一同で感激しました。

来るべき21世紀初めの50周年へ向けて、着実に、鐘楼の鐘がもつと大きな音でどこまでも鳴りひびくように、信徒一同心を合せて努力しております。（信徒会長・河田安良）

【編集後記】



マザー・テレサ旋風が巻き起つた仙台教区。実行委員の人たちの連日連夜の奔走に敬意を表す。かつて聞いたマザーの言葉がよみがえる。「自分自身を完全に神に委ねなさい」。物・お金・他人の思惑にはなく、神に自分を委ねて神の道具となつた時、私たちがマザーの輝きを身にまとう、ということだろう。